

## 警察庁長官表彰受賞者からの寄稿文 より良き世界のために

防犯設備士委員会 委員 / RBSS 委員会 委員  
高千穂交易株式会社 システム事業本部  
アシスタントマネージャー

瀬澤 外茂幸



「あなたにとって働くことの意味とは?一言で言う?」  
聞かれた男は現代人の命題ともいえるようなこの哲学的な質問に考え込むこともなくさりと答えます。

「私たちは次の世代を担う子供たちに胸を張ってより良い世界を引き渡すため働いているのだと思います。お金をもっと稼ぎたい。昇進や名誉を得たい。個人の事情や経済状況によってそういった方も大勢おられるでしょう。しかしそれだけを働く糧とするならば願望が叶えられたときに活力を失い進歩が停滞してしまいます。そうなれば目的地を失った船のように大海原をただ漂流する難破船のようなものです。」

本寄稿文を読んでいただいている読者のご賢察通り、このように気の利いた格好の良い言葉は当然ながら私の言葉ではありません。10年以上前に世界中の賢人にインタビューを行うといった番組の一節だったように思います。番組名も発言者も記憶が曖昧であり、誤った記述をするわけにはいかないので明記は避けますが、この言葉だけが記憶に残っており、これを引用させていただいた次第です。

コロナ禍が始まる直前の今年3月初旬に親しくさせて頂いている日本防犯設備協会の理事の方から「何故そんなに防犯活動を頑張ったのか」と思いもかけない質問を投げかけられ、伝えたい思いはあるものの、その時は歯切れの良い返答はできずじまいでした。

大変光栄なことに警察庁長官表彰を拝受させていただくこととなり、本寄稿文の紙面をもって理事への回答とさせていただきますと存じます。

私が日本防犯設備協会の委員会活動に参加したの

は平成11年(1999年)『ストアセキュリティガイド』を作成するため防犯システム委員会が最初でありました。

当時の治安情勢を計る指標として刑法犯の犯罪認知件数が挙げられますが、当時は平成8年より毎年戦後最多を更新しており、平成14年(2002年)にはピークとなる285万4,061件を数えることとなります。

私が日本防犯設備協会へ縁あって参加した時は、まさしく日本において犯罪が横行しつつあり、人々が安らぎを得ることに希望が見えない不安な社会が到来しつつあり、いつ犯罪の被害に遭うのか緊張感の絶えない疑心暗鬼の世界であったように思います。

なんの落ち度もない市井の人々が犯罪の犠牲になるやもしれない不安を抱えながら生きていく社会が素晴らしい社会であるはずがなく、窃盗や殺人の報道を見る都度、やり場のない怒りと閉塞感を感じた自分が思い出されます。

このような事態を打破するため危機感をもって警察庁、国土交通省、経済産業省の3省庁とサッシ、ドア、鍵、硝子、防犯フィルムの各工業会5団体、建築や防犯に関連した公益法人等の民間団体とともに侵入盗の攻撃に5分以上の抵抗時間を有する強い開口部建材の開発と普及を目的とし、平成14年11月25日に『防犯性能の高い建物部品の開発・普及に関する官民合同会議』が設置されました。

まず行われた内容は、予察試験といわれるものであり、現在流通しているサッシや面格子等が侵入攻撃に対してどれほどの抵抗時間を有するかの確認や、試験方法の細則案に基づく試作品の破壊実験などでした。

当時私はBSSマーク制度委員会の委員長として就任したばかりではありましたが、サッシメーカーの野田工場試験棟やベターリビングのつくば試験センターなど関東近隣で行われた参加可能な予察試験のほぼすべて

を視察することができました。

危機に直面し、官と民が一体となりこの世にないものを生み出すエネルギーを身近に肌で感じられたことは私の大きな宝となっています。

官民合同会議に関わる多くの方のご努力の成果としてついに平成16年(2004年)防犯性能の高い建物部品(略称:CP部品)の目録が公開されました。

良いものができたとはいえ、多くの方にその存在を知っていただくことができれば普及はままなりません。

とはいえ一人一人、一般の方に侵入手口の情報を詳しく伝えることははばかられますし現実的でもありません。

そのようなときに防犯設備士委員会においてテキスト改訂を行うこととなり、CP部品に関する情報を大幅に加筆する作業に参加する機会を得ました。

私の稚拙な知見だけでテキストを完成させることなど当然できようはずもなく、CP部品5団体ならびにロックセキュリティ協同組合の全面的なご協力を賜りました。今思い返しても大変ありがたく感謝に堪えません。

私自身もまことに微力ながら、各地の防犯協会が主催する防犯活動推進員等の研修会での講話や、警視庁警察学校、警察庁警察大学校での講義においてCP部品の素晴らしさについて予察試験の動画をまじえながら可能な限り話をしまいましたが、身は一つであり、限りがあります。

多くの防犯設備士が専門的な知識をもってCP部品の良さを正しく広く伝えていただければ普及の一助に必ずなるものと確信していました。

平成28年(2016年)の犯罪認知件数は99万6,120件と戦後初めて100万件を下まわり、令和元年(2019年)には74万9,000件を下まわり戦後最少を更新、ピーク時である2002年から17年連続で減少し、件数はほぼピークの4分の1の水準まで減少しました。

このような劇的な犯罪の減少は世界のどの国でも成しえない日本の誇れる成果と言えるものです。

この成果は1つの施策で成しえたものではありません。

警察庁による『特殊開錠用具の所持の禁止等に関する法律』、国土交通省による『住宅の品質確保の促進等に関する法律』に基づく住宅性能表示制度10番

目の項目として『防犯』が追加されるなど、法の整備を精力的に各省庁が推進されたこと。

また、街頭防犯カメラの普及やカメラの性能向上による画像の鮮明化。

そしてなによりも、自分の地域を守りたいという様々な防犯ボランティアの方々の活動が相まって成しえた偉業であることに疑いの余地はありません。

「私は次の世代を担う子供たちに胸を張ってより良い世界を引き渡すため働いたといえるだろうか?」自問しても今答えを出すのは尚早というものであり、他の人から評価を受けるものでもないように感じます。満足して鬼籍に入ることができればそれで良いように思う今日この頃です。

コロナ禍の今、わが身を犠牲にしても現場を離れない医療関係者の方々、ワクチン開発や創薬で尽力している科学者の方々がいます。アプローチこそ違えど、今より、より良き世界を目指すというベクトルは同じように感じます。

ご指導いただいた先輩諸兄の顔を思い出しつつ、警察庁長官表彰をいただいたことを励みとし、今後もより良き世界の実現に向け自分なりの道を歩みたいと思っています。